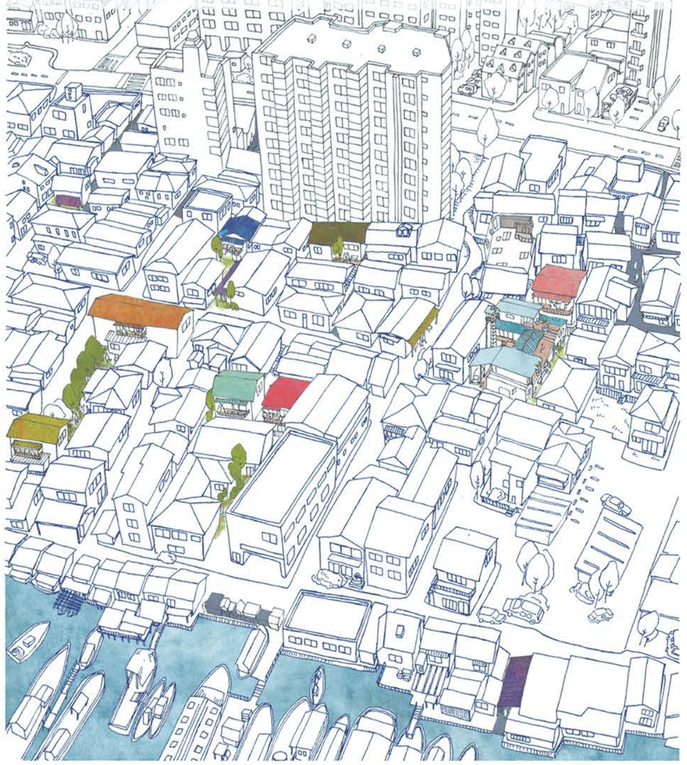
The hybrid of refuge and prospect

地理学者であるジェイ・アプルトンは動物行動心理学に基づき「眺望ー隠れ場理論」というものを提唱した。

東京湾沿岸の再開発が進む海沿いの町を眺望と隠れ場という観点から見てみると、動物が本能的に感じている都市に住む快楽が浮かび上がってくるのではないだろうか。



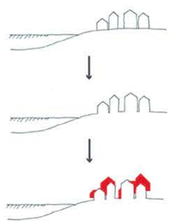
1. 眺望ー隠れ場理論とは

地理学者であるジェイ・アプルトンは観察者が見ることを妨げられない場合、その状況を「眺望」と呼び、観察者が隠れることができる場合には「隠れ場」と呼ぶこととし、姿を見せずに相手を見る、という欲望が、人間が風景を美しいと感じる大きな所以なのではないか、という仮説を、「眺望ー隠れ場理論」と定義した。現代の都市をこの眺望ー隠れ場理論という観点から見つめ直してみると、人間が都市に住まうことの快楽を本能的に捉えられるのではないかと考えた。

2-1. 子安浜で生まれる新たな住環境

再開発が進む東京湾岸の町を眺望と隠れ場という観点から見てみる。床面積とセキュリティといった個人の隠れ場と、海への眺望を確保すると必然的に町は高層マンションで埋め尽くされてしまう。神奈川県横浜市神奈川区子安地区も同じような状況に置かれている。しかし、そのような環境は人間が本当に快楽を感じられるような空間であるだろうか。過剰な高層化は海と生活環境を切り離し、周囲からの視線に強くさらされ続ける。観察する人は眺望を強く感じることはできても、観察する風景に身を置いているという感覚はなくなり、高すぎる位置から捉えた隠れ場は観察者自身を落ち着かせないのではないだろうか。つまり、このような眺望と隠れ場が互いに独立し、呼応しない環境ではなく、眺望と隠れ場の組み合わせのバリエーションが都市に住むことをより豊かにするのではないか。そこで、個人個人が密集した隠れ場を形成する雑多な子安浜の漁村集落の中にこそ、眺望と隠れ場のハイブリッドが存在するのではないかと考えた。

3-1. 提案



子安浜の漁村集落で見つけた隠れ場と眺望のハイブリッドの特徴は

- **空き家となった古い住宅、離れなどが、子安の地形の延長として使われている。**
- **身体スケールの変化で、隠れ場と眺望の関係性が成立し、変動できる。**
- **地形と連動した各住宅が所有する隠れ場は気づきにくく、他社に偶発性を与える。**

といったことがあげられた。

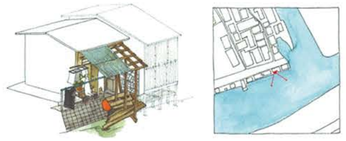
そこで、かつての漁村集落の住宅群を現在のこの土地と連動した地形とみなし、「高層と低層の間」という新たな敷地に既存の眺望と隠れ場に連動した住宅を提案する。

子安浜における、人間が本能的に快楽を得られる居住空間を模索する。

2-2. 子安浜に残る住環境（眺望と隠れ場のハイブリッド）

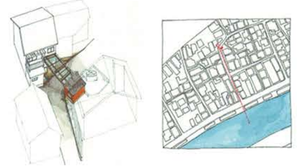
子安浜の漁村集落で見つけた８つの代表的な眺望と隠れ場のハイブリッド。住民が子安の地形を本能的に捉え、見つけ、作り出す空間から、人間が都市に住む快楽とは何なのかを学ぶ

ハイブリッド１



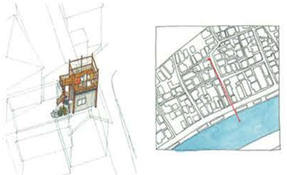
海にせり出すタイプ。海沿いの船着き場としては典型的な子安の風景。
庇が深くでていて、光と高架からの視線を遮る。ベンチに座ったときにちょうど海への眺望が抜け、身体スケールで眺望と隠れ場の関係性が成立する。

ハイブリッド２



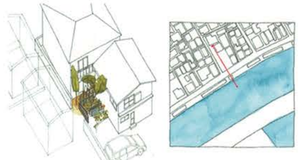
ちょうど道がカーブする位置に離れへと屋根がかけられる。庇の下はちょうど３面が面われていることになり、玄関からは日差しを遮りながら海への眺望がのぞめる。離れには目隠くらいの位置に窓が一つだけついており、離れの小さい空間から海へぬける眺望が見渡せる。

ハイブリッド３



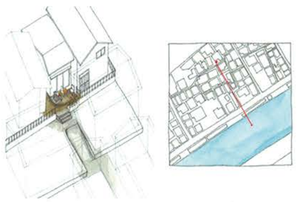
住宅と住宅の関にある小さい離れの上にかけられたテラス。住宅の高さが、街路からの視線を遮るが、少し横にせり出したスペースからは海への眺望を得ることができる。

ハイブリッド４



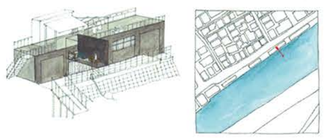
植物で境界をつくって視線と日差しを遮りながら海への眺望を得るタイプ。住宅で密集したエリアだけでなく、駐車場や空き家を取り壊してできる大きな空間に対しても、植物で視線を遮る例は他にも多く見られる。

ハイブリッド５



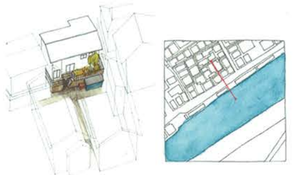
４方向すべて住宅に面まれている縁側。地形の高さが狭いスペースで変化する。そのため、道を歩いているときは、住宅関の境界が雑多に感じるが、ベランダ下のこの縁側のスペースでちょうど海までの眺い眺望がぬける。

ハイブリッド６



RC の倉庫によるハイブリッド。現在は駐車スペースとして使われているものが多く、分厚く面われた空間は風通しがよくすずしいため、静かに海を見渡せる。子安の地形と連動して作られた躯体は機能を失いつつあり、もはや地形になりつつある。

ハイブリッド７



小さなアルコーブによる空間。階段の段差に腰掛けると３方向が密閉された小さな空間で面われ、海への眺望がぬける。

ハイブリッド８

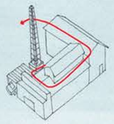
街路である階段との境界にできた空間。階段の高さがちょうど住宅のベランダスペースを隠し、４方向が面われた空間から、眺望を確保することができる。階段を造ってるいる人からはまったく気づかれない。

3-2. 対象敷地

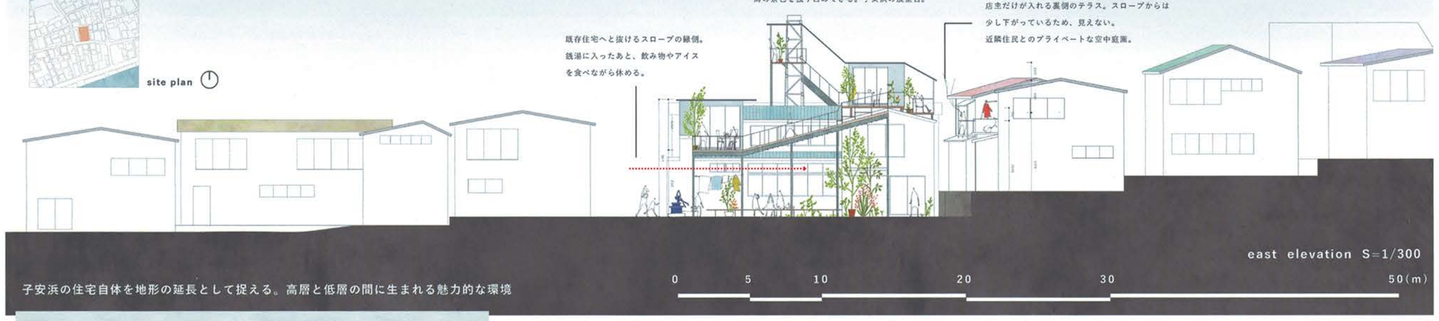
site plan

対象敷地は子安浜地区の漁村集落に残る町の小さな銭湯井川湯である。神奈川県でも数少ない現役の井戸湯の銭湯である。子安浜には小さな住民間におけるコミュニティは点在しているが、「町のたまり場」というものが存在しない。住民間のネットワークを集約し、町の住民が集える本当に居心地のいい場を、町の小さな銭湯を起爆剤に展開する。

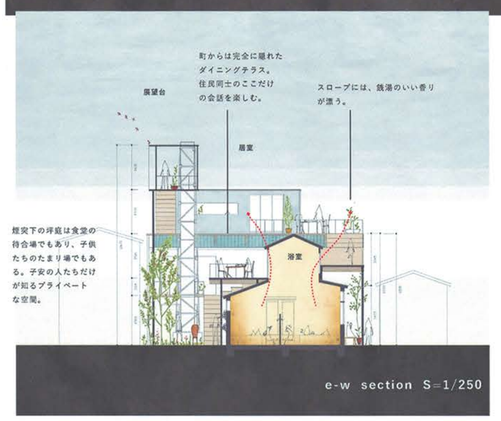
3-3. ダイアグラムとプログラム（町の銭湯 × 食堂）

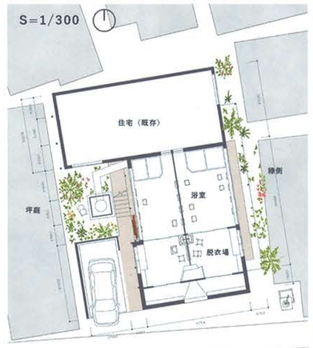


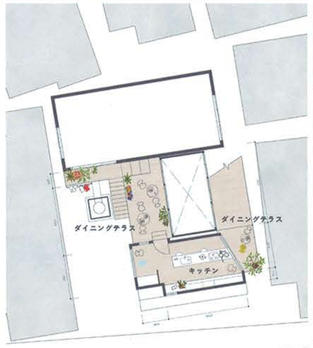
井川湯は銭湯の空間と居住空間の２棟が併設されており、煙突も含めそれらは階層的に高さを変化させる。建物の高さに沿って、螺旋状に食堂を併設した住宅を巻き付かせ、現在の職と住が分断された関係性を変化させる。スロープやデッキはダイニングテラスになり、高さを変えるごとに周辺の住宅との間に形成される隠れ場と眺望の関係性は変化していく。

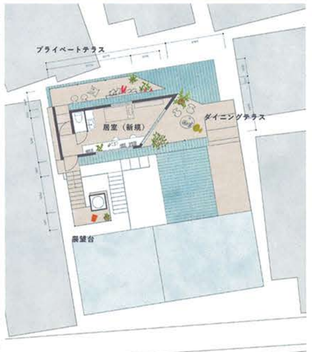


子安浜の住宅自体を地形の延長として捉える。高層と低層の間に生まれる魅力的な環境

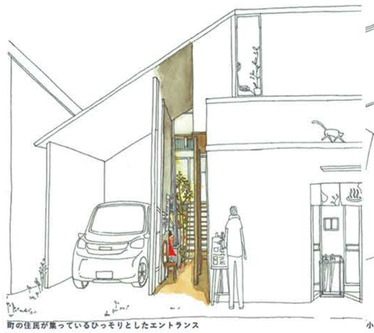




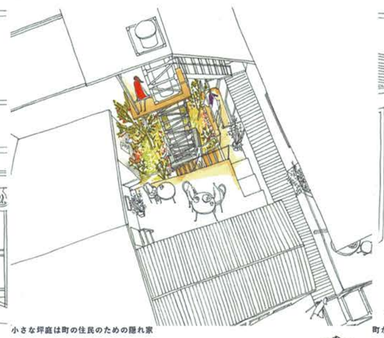




再開発に取り残されたように佇む子安浜の中で、眺望と隠れ場の組み合わせは都市に住むことの快楽を見つけられるような空間をつくる。



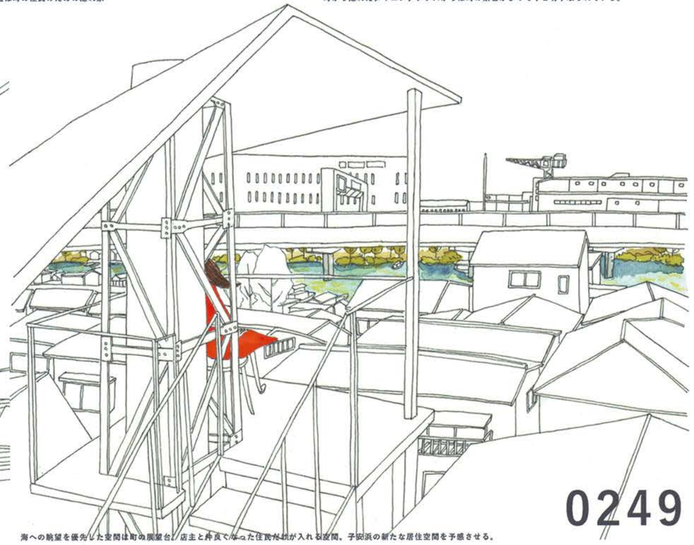
町の住民が集っているひっそりとしたエントランス



小さな坪庭は町の住民のための隠れ家

町から隠れたダイニングテラスからは町の景色がひっそりと切り取られている。

居室のテラスは高層と低層の間にひっそりと隠れ、都市のスリットをのぞむ。



海への眺望を優先した空間は町の展望台／店主と共同で作った住宅格好が入れ替る空間。子安浜の新たな居住空間を予感させる。